アクティブ・ラーニングを促す授業づくり（Tスタンダード）

授業スタイル

※本授業スタイルについては、戸田市立戸田第二小学校の研究を基に、戸田市教育委員会が作成したものです。

導入

インパクト・コンパクト

- 児童生徒が思いをはせるインパクトある導入を
- 短い時間で意欲を高めるコンパクトな導入を
- 本時のめあてや学習課題を提示し、児童生徒が見通しをもてるようにする導入を

展開

学び合いのはじまりをつかむ

語り出そうとする児童生徒の言葉に注目

「だって・・・」「でも」「えっ？」「そうか」「ああ」「なるほど」「もし」「じゃあ」「たとえば」「そしたら」　など

対話によるファシリテート　実態把握→共感→問いかけ

実態把握

a　思考「どんなことを考えてきたのか。」　b　発見「気付いたことは何か。」
c　取組「どんなことに取り組んできたのか。」　d　工夫「どんなことを工夫したのか。」等

共感

「そう考えたのか。なるほど。」「おもしろいことに気付いたね。」「よい〇〇だね。」等

問いかけによる思考の活性化

a　予想させる「〇〇さんの気持ちがわかりますか（続きが言えますか。）」
b　再生させる「〇〇さんの考えを隣同士でもう一度伝え合ってみましょう。」
c　要約させる「〇〇さんの考えをまとめられませんか。（わかりやすく名前をつけましょう。）」
d　発見させる「〇〇さんの工夫しているところ（または考えの共通点）はどこでしょうか。」
e　探らせる　「〇〇さんは、なぜその考えが思いついたと思いますか。」
f　揺さぶる　「本当にそれでよいのですか。」「（わざと間違えて）これでいいですね。」
g　修正させる「この考えのどこを直せばいいのでしょう。」
h　比べさせる「自分の考えと共通（違う）していることは何でしょう。」
i　気付かせる「友達の考えで工夫している（よい・わからない）ところはどこですか。」
j　工夫させる「もっと簡単に（わかりやすく）できる方法はありませんか。」

児童生徒が対話しながら学び合う場の設定

※ねらいを明確にした話合いはもちろん、児童生徒の反応や理解度等に応じて臨機応変に場を設定する。

学習形態

目標の実現に適した学習形態の工夫
（個人、ペア、グループ、全体）

個 → グループ → 全体

終末

児童生徒に教えたいことほど「教えない」

児童生徒に気付かせる・児童生徒が感じとる・体得することができるように

学習の振り返り＝未来へのベクトル

「次に何をしたいのか？」、「これからどうするのか？」を問うことが振り返りとなる

●課題は、「手を伸ばせば、届きそうだけど、なかなかつかめないところにある状況」（ちょっと高いハードル）のような状態であることが必要。

●アクティブ・ラーニングでは対話が大きなウエイトを占める。対話が得意でない児童生徒でも、「自分も話をしたい。」（積極的に話ができる）と思わせることが重要。

●児童生徒の力を信じることが大切。教師と児童生徒の信頼関係が、アクティブ・ラーニングでは必要。

●教師が「しゃべらない時間を多くつくる」、話を「いかにしないか」が、ポイント。

（ノート等を）「書く時間」と「話す時間」は分ける。（同時に行わない。「書いた」ことを基に「話す」ことが、話す意欲につながる。）

●「家に帰ってまで、追い求める深い課題になっているか？」「学び続ける問いになっているか？」という視点が必要。

●「問題を解決する力」以上に「問題を発見する力」が必要。（問題を解決する力は受け身でも身に付くが、問題を発見する力は、より主体的でないと身に付かない。身に付くと、学び続ける児童生徒になる。）

●児童生徒は対話する力をもっている。それを信じること。

３人グループの推奨

- 北小トライアングル（新曽北小）
- 文殊の知恵（美女木小）
- ①A,②not A,③聞き手（戸田中）

※５人だと、多すぎで言語活動の充実とならない。（一人の話す時間、量の確保ができない）

●「児童生徒が学び続ける」上では、「教師も学び続ける」ことがアクティブ・ラーニングでは必要。絶えず、授業をリフレクション（振り返り）すること。